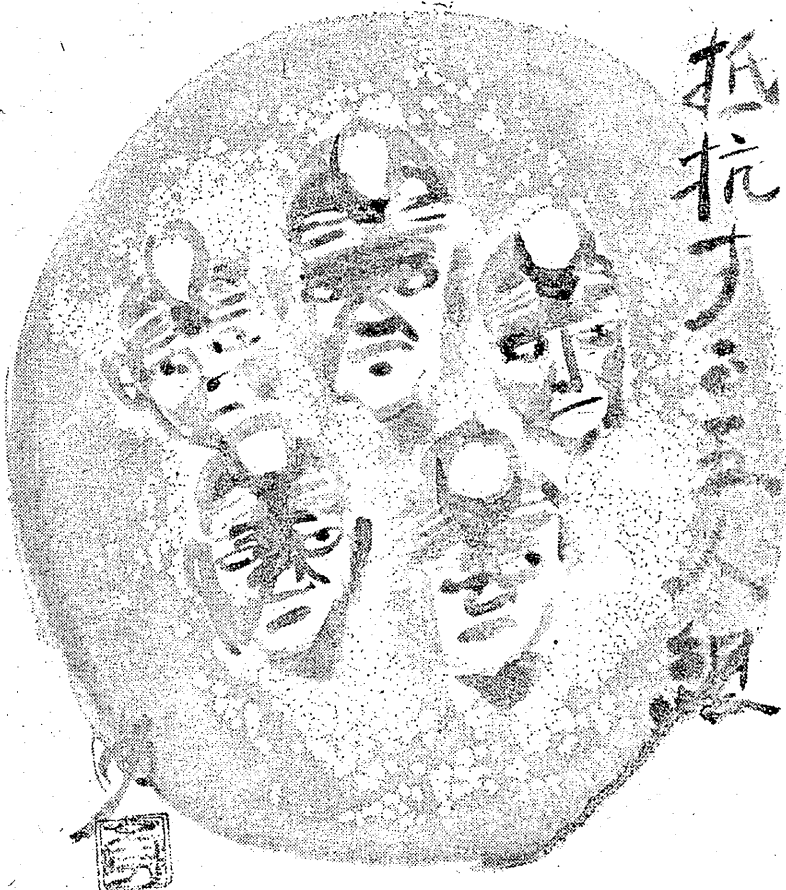


新年文芸



上の作品は、昭和40年8月に停年のため退職された田中勇吉さん(三川)のものです。現住所は「荒尾市蔵満368」で、病後の静養生活を送っております。どうか励ましの便りを出してください。

詩の部

CO患者

四山 岩下 武文

もう八年にもなった
痛々しい日は思い出したくないが
思い出さずにはいられない
合理化、会社の保安サポによって
一大合理化
人間べらし
三川大爆発にて
四八八名死亡
八百名余りのCO患者を残した
この間
テレビで六年間も意識をなくした息子を
母さんと父さんがつきっきりで看病
したのが涙をこぼした
CO患者の一人
赤ちゃんみたいな人も多数あり
ひどい人は

坑内帽子

高 椋 竜 生

八年間も身体をベッドに
意識がない人がある
八年間も呻きながら
世間を全然知らないのだ
呻き声はどうして
私たちに聴こえられない
しかし
現実だ
また、小学程度の知識を持った
CO患者が多数居ることを知るべきだ
CO患者の身になって
あのいまわしい現実が
二度と繰返したくない
炭掘ることに翻弄する会社
合理化はまたもや
死を呼ぶだろう
八年間も何んにも知らない
CO患者
あの呻き声は
私の脳裡をかすむ
絶対忘れることのない
この呻きは一生消されないだろう
会社よこの呻きをきけ、
おれの坑内帽子の脳天に
穴が一つかき目をむいて
二〇ボルトの電気が流れてとろけた穴だ
おれが、坑内のひとり線り込みは止めろと
職制に抗議したその日のできごとである
電車のトロール線にひっかかって
坑内帽子からボボボボンと白く火を噴いたが
汗皮がビニールだったのだ
体に電気が流れずに助かった
すんでのところ殺されるとこだった
おまえと おれは
どんなときでもいつしよだった
岩粉で白くなったり
炭塵で黒くなったり
天窓から降る雨でボトボトと泣きこみたに
おまえがわびしい首を頭の上でたてながら棒を張っ
たときは弱ったな
ほら、岩が落ちてきておまえがすつとんだらう
あどきは胆(きも)を潰したよ
汗で目がつぶれそうになったとき
坑内水でおまえをすぷりと冷やし冷やし
脚をふんばってハイプかいたな

生活

宮浦 平田 光男

腰が痛い
体をかためて
昇坑入車に乗り込む
ほつとする
よたよたして
あの重い
金梁(かなはり)を
かついだ苦しみ
足場は悪し
先山が
ハラハラして
俺を見ている
みんながひやかす
おまえは入坑する時
しんとしたたが
一日もてたやつか
俺は無理して笑顔を作る
明日の生活の為に

短歌の部

指導部旅行

より

三川 木村 守

なつかしく声掛け合いて坐れども話題豊富なる友
に疲るる
一袋五厘の電車賃より五厘高きバスに傾れ乗りし
と言へる
労働者なれば寒さに行き馴れてバスの保温を止め
させてお
入り来れば人丈ほどの男性器雄ちあり祈願の蠟
涙垂れて
道祖神社のぼりに来れば男性器女性器の型祀る
祠があり

雑感

宮浦 平田 光男

二番方給をかぶって帰る来ぬとその名残りを妻腰
ためつ
今年こそ今年こそと誓えるを家計の赤字うめるす
べなし
成長期ダンスひき出しもひきをつんつるてんで
妻もあわてる

雑詠

四山 堀前はるお

生活を守りつけし妻と交せし層線のはる甘き
かな
「いのち」するごとのみ誓ふ仲間等の層線を交せ
る去年今年なり
闘ひに生活を守る妻も老ひ夜なへの灯りに針の目
探す

賀状

宮浦 前田 義則

ベトナムへ送る賀状にわがこころ書きうつしつ
恥じることなし
野積みせる肝炭に海の風強し稜線動くこと吹か
るる
秋桜子句集をひらく読初というならいある日本に
住みて
まえがきもあとがきもなし晩に読みおえて短歌
(うた) おもく専し(「碧澄」を読む)
首切られたたかうれを励まして届きたる餅かび
てあれども(一九六〇年一月)

娘よ

本所 本村 理子

元旦を車中に迎う帰省の娘に注意したたむ 五日
ごの便
娘の指折り香もかぞゆる帰省の日を土産の品はす
てに届きお
特技なく夫をたよりに生きる香一日として安らふ
日なし
日中を一人居る香淋しきに見もせぬテレビつけは
なしお

おわび

新年文芸作品募集にあたり、各分野の専
門家に選を依頼することをお約束しましたが
編集者の病氣などにむきあわれ、作品が期
待したほど集まりませんでした。
ですからその方法をやめ、次号に専門家の
批評をお願いすることに致しました。ご了解
をお願い致します。 編集部